

SaaSのように手軽に導入できて、フルスクラッチのように  
貴社の業務に合うテーラーメイドなシステムを作れるAI基盤

# ← PortX Formula

紹介資料



業務変革の選択肢

# 業務を変えたい時、貴社の選択肢は3つ

どれにも得意な領域があります。

選択肢 1

## パッケージソフト・SaaS

標準的な業務には強い。導入も比較的早い。会計、人事、勤怠など、多くの会社に共通する業務に向いている。

選択肢 2

## ノーコード・簡易ツール

手軽で始めやすい。現場の担当者でも触れる。小さな改善や、部門内の業務効率化に向いている。

選択肢 3

## システム開発（SI）

貴社の業務に合わせて作れる。複雑な業務、部門横断、大量データ、高い信頼性が求められる領域で使われる。

問い

## でも、貴社の競争優位を実装したいなら？

他社と同じ業務をするだけなら、選択肢1や2で十分です。

しかし「貴社固有の強み」を業務として実装したい場合、話は変わります。

パッケージソフト・SaaS

### 標準業務向けに作られている

どの会社にも共通する業務を効率化するためのもの。貴社固有のやり方や、業界の競争優位に直結する業務には合わせられない。

ノーコード・簡易ツール

### 複雑な業務には届かない

小さな改善には便利。しかし部門横断・大量データ・例外処理が多い業務には対応しきれない。競争優位を実装するには力不足。

→ 貴社の競争優位を実装するには、**システム開発（SI）の選択時しか残らない**

SIの構造的な問題

## しかしSIには、2つの構造的な問題がある

どちらも担当者の能力ではなく、SIという仕組みそのものに由来します。

問題 1

### 上流が決まらない

「現状の業務がどうなっているか」「どこに問題があるか」「ありたき姿はどうあるべきか」が整理されないまま、システム選定や開発に進んでしまう。

→ 何を作るべきかが定まらない

問題 2

### 仕様書と実装が分離している

仕様書はExcelやWordで作られ、実装コードとは別管理。変更のたびに両方を更新する必要があり、すぐに整合性が崩れる。

→ 設計と実物が常にズレる

問題 1 - 上流が決まらない

## 「何を作るべきか」が定まらないまま進む

SIプロジェクトの失敗の多くは、上流の整理不足から生まれます。

よくある状況 1

### 現状が見えていない

「今の業務、どうなってる？」と聞かれても、部門ごと・担当者ごとにやり方が違って整理できない。

よくある状況 2

### 問題の所在が曖昧

「うまくいっていない」のは分かるが、どのプロセスのどこに問題があるのか、特定できていない。

よくある状況 3

### ありたき姿が描けない

「どうなりたいか」を聞かれても、具体的に答えられない。だから「現行を踏襲してください」になってしまう。

この状態でシステムを作っても、競争優位は実装できません。ありたき姿が定まらないまま作ると、現行の業務がそのまま電子化されるだけで、効果が刈り取れない上に、かえって使いにくく業務負荷が高くなる。

問題 2 - 仕様書と実装が分離している

## 各フェーズで「同じ情報」を別の書式で作り返す

ウォーターフォール型では、各フェーズで大量の成果物を人手で作り返します。後半になるほど、ズレの影響が膨らみます。



### 成果物の揺れ

各フェーズで「同じ情報」を別の書式で作り返す。フェーズ間で内容がズレていく。

### 後半に爆発する手戻り

要件のズレがテスト段階で発覚。修正コストが数倍～数十倍に膨れ上がる。

### 膨大な人手と時間

成果物を作るのも、レビューするのも、修正するのも、すべて人手。だから遅く、高い。

PortXのアプローチ

## 2つの問題に、2つの解で答えます

前ページまでに見た「上流が決まらない」「仕様書と実装が分離している」を、それぞれ別の主体が解決します。

### 問題 1

#### 上流が決まらない

この問題を解くのは →

### PortXのFDE

Forward Deployed Engineer (人間)

FDEが具体的にやること

- ① 現場・経営層へヒアリングし、現状業務を整理する
- ② どのプロセスに問題があるかを特定する
- ③ ありたき姿と効果の刈り取り方を貴社と一緒に描く
- ④ 競争優位に繋がる業務設計を仕様書に落とす

### 問題 2

#### 仕様書と実装が分離している

この問題を解くのは →

### Formula

PortX独自のAI基盤

Formulaが具体的にやること

- ① 仕様書から、画面・データ処理・データベースを自動生成
- ② 仕様変更を全成果物に一括反映 (手戻りゼロ)
- ③ テストの自動実行とエビデンスの自動取得
- ④ 仕様書と実装を構造的に一致させ続ける

人間にしかできないことはFDEが、AIが得意なことはFormulaが。この役割分担が、PortXのアプローチです。

Formulaの仕組み

# 仕様書を変えるだけで、すべてが自動で更新される

人が書き換えるのは、業務の仕様書ただ1つ。そこから全ての成果物が生成・同期されます。

<p>唯一の正本</p> <h2>業務の仕様書</h2> <p>人が書き換えるのはこれだけ</p> <p>変更方法</p> <p>日本語で指示</p> <p>「検索条件を追加して」</p> <p>「タブを4つに分けて」</p>	仕様書から自動で生成されるもの	
	<p><b>画面</b></p> <p>ブラウザで動くユーザー画面</p>	<p><b>データ処理</b></p> <p>業務ロジック・計算・連携</p>
	<p><b>データベース</b></p> <p>テーブル定義 + 初期データ</p>	<p><b>変更履歴</b></p> <p>変更内容・影響範囲の自動記録</p>
	<p><b>自動検証</b></p> <p>画面・処理・データの動作確認</p>	<p><b>エビデンス</b></p> <p>スクリーンショット + 検証レポート</p>

速さ

## 圧倒的に速い

成果物を人手で作り直す工程がゼロ。仕様変更から全成果物の更新までが即座に完了。

品質

## 構造的に高品質

正本から自動生成するため「設計書と実装が違う」「テスト漏れ」が構造的に起きない。

コスト

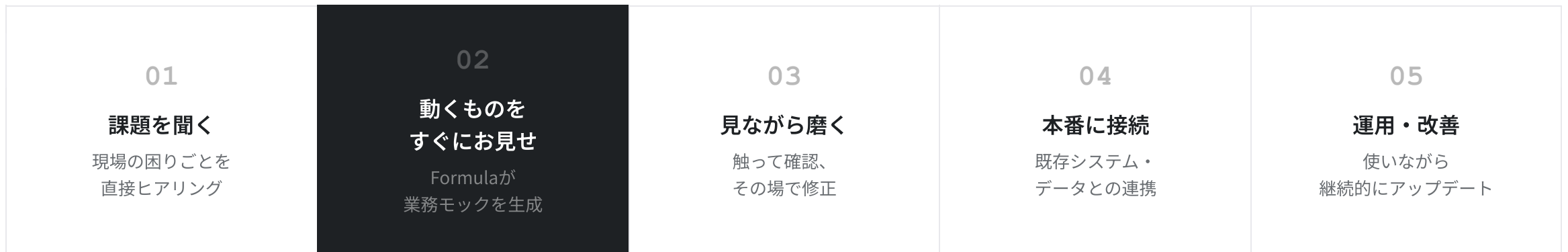
## コスト構造が違う

設計書作成・レビュー・転記・テスト作成。従来の工数の大半をAIが自動で処理。

導入プロセス

## どう進めるのか

最初に動くものをお見せし、それを見ながら一緒に磨いていきます。



**ポイント：**動くものを見るのが「半年後」ではなく「最初」。だから、ズレが生まれにくい。

## 会社概要

会社名 株式会社PortX / PortX Inc.

代表者 石田 寛成

資本金 1億円（累計調達金額7.2億円）

設立 2019年12月6日

本社 東京都新宿区新宿2-5-12 FORECAST新宿AVENUE 6F

事業 AIネイティブなエンタープライズSI基盤の提供

# 貴社の競争力に直結する業務を、 今日から仕組みにできます。

たとえば、納期回答・在庫判断・受注配車・生産調整——  
ベテランの判断や、Excel・電話で回している業務から。

お気軽にご相談ください